

海外だより

世界かけめぐりの記

厚生省大臣官房企画室 寺松 尚



I
私が3カ月の世界かけめぐり旅行のため羽田を後にしたのは残暑でむしむししていた昨年の9月初めのことであった。この旅行をご気嫌にさせてくれたのは訪れる国が米英ソ、それにチェコ、オランダ、西ドイツ、スウェーデンの7カ国で、しかも経済的、社会的バックグラウンドがそれぞれ異なっていることである。さらにいいことには団体旅行でなく、1人旅である。そこで思い出すまま、旅の記を記してみたい。しかし、何分にも思い違いあり、language barrier ありで間違いの危惧もあり、ご指摘いただければ幸いである。

羽田から約10時間、アエロフロートで着いたのが、モスクワ郊外のシエレエメーチエボ空港であった。この10時間も機内で10年振り

に日ソ文化交流でソ連に行く旧友に逢い、ウオッカやロシアコナヤックで旧交を温めたためか短かく感じたほどであった。ソ連の保健省には前もって到着時間やフライトナンバーを電報で知らせていたため、迎えの人が来ていてくれて一般乗客や日ソ文化交流団の人々をしり目に税関等の手続きもスムーズにすまうことができ、わが国では味えぬ役人の役得を共産主義国家で十分堪能できたのは皮肉であった。これは国際課の渡部さんのご忠告によったもので今なお感謝しているところである。私の滞在2週間ずっと通訳をしてくれたのはモスクワ大学出たてのレーナで、英語が上手で、歴史、文化、美術となかなかレパトリーが広い。もちろん美人で、はにかみ屋である。滞在中何度も美術館や博物館に案内

されたわけであるが、それは彼女のレパトリーの広さだけでなく、これら美術品や芸術品がソ連国民の誇りであり、精神的糧であることを私に教えるためであったようである。確かに、モスクワではあちこちに美術館、博物館、劇場、プールなどを見かけ、そのストックの厚みには敬服したところである。

9月とはいえ、モスクワだから涼しいだろうと思っていたところ、暑くて暑くて扇子をバタバタやらねばたまったものではない。よく聞いてみるとこの夏は80年振りの猛暑とか、しかし、私のホテルではどこにも冷房は見附からなかった。

ご承知の通り、ソ連は今第9次5カ年計画が進行中であり、昨年はその2年目にあたっていた。その目的は労働者の生活水準の向上であり、昨年9月1日には医師の給与が23%以上もあがったのをはじめ、60万人以上の保健関係者も飛躍的にあがったとのことで国内はもちきりであった。私が聞いた若い医師の給与は約150~200ルーブルということであるから、日本円で約6万円でそう高い給与ではない。この5カ年計画の成功が云々されてい

るなかで、農業の不振が著しく、食糧の不足は深刻で米国から多量の小麦を輸入する話が出かけていた。あるホテルのバーであった英国人がこれで当分平和共存だよといていたのが記憶に残っている。街を歩いてみると、店頭ショーウィンドウに飾られた商品は数種類も少なく、午後の4時半頃からほとんど女性からなる行列が店頭並ぶ。しかし、デパートや商店も夜遅くまで開いている店もあり利用者には都合がいい。ソ連人はよく働くともみえて夜12時近くでも地下鉄や街路を清掃している老婆をよく見かけた。保健省、研究所、病院を訪れてみると、そこで働く医師や研究者にやたらと女性が多いのに気付く。

性比を聞いてみると、医師では80%が女性。その理由は保健医療や福祉の仕事は女性に向くからとのこと。因みに、医師の人口10万対の数は世界最高で、1965年44万人であったのが年々大幅に増加し、1971年には66万人、人口10万対300に達しており、米国の2倍、英国、スウェーデン、わが国の3倍で医師不足に悩むわが国にとってはうらやましい話である。その上に、中国の裸足の医者に相当す

るフェルシャは1965年36万人いたが、今は9万人ぐらいとのことであるが、へき地で住民の身近にいて大いに活躍しているそうである。しかし、ある高官の話では質の良い医師をどんどん養成しているから、今後はフェルシャは養成しないとのことであった。米国ではまったく同種のものではないが副医師(Physician's Assistant)をどんどん作るというのと合せ考えるとなかなか興味深い。医師の養成、医療の質、医療供給システムがいずれもよくまとまり立派であるが、一つだけ気に入らぬことがある。それは患者の医師選択権である。患者が医師を選べないのはけしからんと私がいうと、不思議そうにして、ある高官は「わが国は質の高い医師をつくる努力をしており、心配はいらない、どの医者にかかっても同じこと」といったのには驚き入った次第である。

モスクワの夜に移ると、レストランの食事のサービスには時間がかかることは聞きしに優るもので1時間はだまって待つ、この辛抱が必要である。しかし、よくしたものでドル、マルク、円を使う気なら、食事も早いし、肉も

うまいところはインツーリストホテルの地下など何か所がある。おみやげも品物が豊富で、高価な琥珀などを売っているドルショップも市内各地にあり便利であるが、メイド・イン・ジャパンも多いので十分注意が必要である。

ソ連、特にロシア共和国では独りっ子家族が多い。通訳のレーナも独りっ子だし、友達も皆独りっ子だそうである。その理由はソ連婦人は主婦、妻、職業婦人の3役をやっている上に、アパートが狭い、幼稚園サービスが悪い、家族手当が低いなどだそうである。あるソ連記者が書いた英字新聞の記事によると、独りっ子家族は良い家庭生活、妻には流行服、黒海へのバケーション旅行を約束することだから、今、ソ連政府はやっきになって独りっ子家族撲滅運動を展開中だが、その成果は今のところ上りそうにもない。また。離婚率も高く、わが国の2倍もあり、それは労働力不足が慢性的であり、職業婦人が多いのが原因であろうか。モスクワを離れる時もレーナに助けられ、出航手続きもスイスイと終え、保健省の人々に感謝しつつシエレーメーチェボ空港をストックホルムに向け飛び立

った。快音を発しながら上昇をつづける機内から見える美しい森に囲れたこの空港で2カ月後あの日航機の大事故が起り、私の従妹夫妻一家4人が全滅するとは夢にも思わず、早や私の心はストックホルムへと飛んでいた。

II

スウェーデンは世界最高の福祉国家といわれている。訪れてみると、確かに地方自治を尊重し、豊かさを感じさせる国である。国土は45万平方キロであるからわが国よりも広く、人口は800万、わが国の8%にすぎぬ。ベッド数は15万、そのうち4万が精神病床であることが特徴で、豊かさは精神的苦悩を癒すことができないことを示すのであろうか。全国を人口100万程度の7つの医療区にわけ、ベッド数1,200~2,300の Regional Hospital があり、各州には Central General Hospital、そのしたに Local District Hospital、さらに Health Center やナーシングホームがあり医療供給体制は実にきめ細かくできている。ソ連では私のスケジュールをタイプしてくれるよう何度も頼んでも希望が入れられなかったが、ここスウェーデンではスケジュールを打

ち合せしながら、タイプが出来上るのに驚きもし、その手際のよいのに感心した。何事もスピーディである。幹部の人ほどエネルギッシュでよく働く感じであるのに対し、若者達は昼間から酒を飲み、ヒッピースタイルで街をのし歩いている姿をよく見かける。豊かな国、高福祉社会が迎る将来を暗示しているように思えてならない。過度の危惧ならよいが。

スウェーデンでも後半、田舎を訪れるチャンスを持つことができた。ところは中北部のノルウェー国境に近いエステルズンドである。夕方出発の国内航空に乗ろうとしたところ、徹底的な身体検査を受ける破目となった。

どうもテルアビブ、ミュンヘンや私の入国直前に起った国内航空のハイジャック事件のせいであるらしいが、私が日本人であるためと思うのはひがみであろうか。軽装の私を別室に入れ特に念入りにやられたのはこの旅行中最も不快な事件であった。しかし、湖の中の島に着陸しようとしている機内からみるエステルズンド周辺の景色は紅葉が夕日に映えてすばらしく、磐梯スカイライン、十和田湖のそれと劣らず、私の安物のカメラではその

美しさを到底十分に写し出すことはできないのが残念であった。このヘルスセンターのリハビリテーション部を訪れた時、「このようなすばらしい施設でリハビリテーションに励めるスウェーデンの老人は幸せですね」という私に、所長は小声で「スウェーデンでは老人を大事にしすぎるのではないだろうか。この施設では1人1日150~200クローネかかるが、老人の負担はわずかの30クローネです。年金があるので大した負担感はありません。私は給与の60%近くを税金などでとられます。私が老人になった時、今の子ども達は同様に払ってくれるかどうか、心配しています」といったのが印象に残っている。この言葉を聞いた時、手厚い老人福祉サービスを各地でみて、スウェーデンの老人は幸せだと思っていた私の頭上に冷水をぶっかけられ、一瞬目のまえが真暗になるのを感じざるを得なかった。われわれが志向する高福祉国家の建設に水をさす気はさらさらでないが、これは後代の負担を考え、国民の合意を十分得て進めるべきことを教えていると思う。保健や福祉の問題についてはこの国では County Council

が責任を持っていて、病院の建設計画、地域保健計画の企画、立案、実施、評価を行っており、国はガイドラインを作成し、相談にのり、資金の援助をしているにすぎない。

III

この後、デンマークを経て西ドイツ入りをする事となるが、ボン、デュッセルドルフ、ウィスバーデンをたずねてこの国の地方自治の強さ、州の強さをこの肌で十分感じることができた。

ライン、インゲルハイムではワイン祭に出くわし、ミスワインのお酌で歌、ダンス、ワインを堪能し、純朴な西ドイツの土の香りを満喫した。デュッセルドルフの研究所のある教授の忠告で、その後はビールよりもワインを飲むこととしていたが、帰国後、十分その教えを守れずにいるのをかの教授に申し分なく思っている次第である。

チェコの滞在はわづかの5日間となったが、プログラムオルガナイザーの勤勉さが手伝ってたいへんなハードスケジュールとなり、充実していた。しかし、観光シーズン中であり、ホテルがなかなかとれず、やっとヴ

ルタヴァ河に浮ぶ船のホテル、アドミラルをとることができた。このホテルは西欧風で、バーもレストラン・もあり、ピルゼンビール(チェコ語ではプルチェンという)やワインがうまくご気嫌のところである。ホテルから見える悠揚としたヴルタヴァ河の流れ、点々と浮ぶ白い水鳥、対岸の丘に立つフラジンの寺院と旧宮殿の眺めはわれわれ旅の者を魅了する。プラハは歴史の街であり、荘重なプラハ城など歴史的遺跡にはことかかず、かつて人は黄金の都と呼び、ショーペンハウアーはパリにたとえ、彫刻家ロダンはローマにたとえたといわれるほど美しい都であったそうであるが、私のみたプラハはその面影とは別の顔であった。

やたらに老人が多く、公園でもラッシュ時の市電のなかにもずいぶん老人が多い。足を踏んでもそしらぬ顔の老人、チップが少ないと請求する年老いたベルボーイ、おいしいビールとはうらはらに何となく淋しい気持であった。

オランダで訪れた都市はアムステルダム、ウトレヒト、ハーグ、アーネムなどである

が、この国の首府ハーグはアメリカのワシントン、西ドイツのボンと同じく、国内最大の都会ではなく、静かな森に囲れた美しい街である。一口に云ってこの国は自由闊達で、National Hospital Institution の病院建設をとってみても、Sick Fund Council による健康保険をとってみても国民自ら自分達の健康を守るという強い意気込みが感じられる。

IV

英国ではちょうど国民保健事業改造法案が議会に提出された直後であり、オックスフォードの Regional Hospital Board をたづねた時、その内容や実施の具体的方法等についての研究会が行なわれていた。国中がこのための準備に追われていて、関係者の健康が心配であるという大臣談話が新聞に載るほどであった。1948年に始った現行国民保健事業は一般医サービス、病院サービス、地方自治体の行なう対人保健サービスの三本建ての縦割であるものを、新しく設けたAreaのレベルで一本化し、効率的に運用しようとするものである。

看護婦の量の不足と質の低下はこの英国でも大きな問題であり、確か昨年8月 Asa Bri-

eggs 教授を委員長とする看護に関する委員会
は教育問題のほかある専門領域と地域におけ
る不足を指摘し、既存資源の再組織化が望ま
しいと述べている。その勧告の中でおもしろ
いのは男性の看護師の養成をふやすことを提
案している。その理由としてパートタイムが
少ない、看護婦になる前他の仕事を経験して
いる、離職率が低い、貢献の多様性などをあ
げている。

わが国でなじむかどうか疑問だが、検討し
てみてはどうだろ。現在、英国では全看護
婦35万人のうち1割が男性である。

ロンドンに行けば一度は飲みに出掛けるこ
とをおすすめしたい古い有名なパブ・アンカ
ーがテムズ河畔にある。前述のモスクワの日
航機事故のI氏とこの酒場で遅くまで2人で
痛飲し、政治のこと、経済のこと、国際協力
のこと大いに語り合った。彼の熱つばい、低
い声が今でも私の耳に残っている。私が渡米
する前夜、最後に一緒に飲みに出かけた時こ
のパブで、米国経由で帰ること、パブリック
・スクールに学んでいる長男を英国に残すべ
きことなど何度も提言したが、彼は聞き入れ

なかった。虫の知らせか、今となつては無駄
であるが残念でたまらない。一家の冥福を心
から祈りたい。

V

ロンドンのヒースロー空港を正午すぎに飛
び立った私は夕方にワシントンのケネディ国
際空港に着いたが、11月初めということでワ
シントンはそろそろ冬支度といったところであ
った。私のホテルはユニオン駅、中央郵便
局近くにあり、昔はおそらく名門だったので
あろうことはその名が示すが、昔日の面影はな
く、周辺は黒人の住区となっていてさびれて
しまっている。因みに、ワシントンの登録人
口の8割が黒人であるといわれている。

日本料理店のことで一言。ロンドンを除く
ヨーロッパ各都市ではフランス料理、中華料
理には遠く及ばず、ほとんどは日本人客であ
り、観光客であり、地についていない感じだ
が、ロンドン、ワシントン、ニューヨークで
は外人客が多く、むしろ日本人はすみで少さ
くなって食べている。米国では中華料理に追
いつき、追い越す勢である。

飛行機に乗るのにあいたのでワシントン、

ニューヨーク間の超特急メトロライナーに乗
ってみることにした。この超特急はバスや飛
行機に乘客をとられ退潮著しい米国の鉄道の
再興の期待を一身にあつめて、1971年設立の、
半官半民の公社アムトラックの花形である。
ダイヤもほぼ正確で乗心地は新幹線よりよ
く、字も書くことができ、飛行機よりも若干
安く、スピードも毎時200キロ、所要時間も
3時間余である。飛行機旅行の折、わづらわ
しいのはハイジャック予防の身体検査であ
る。話に聞いたところによると、全米で504
の商業空港、毎日15,000便のため3,000人の
ガードマンを雇い、年間5,700万ドルを支払
っているそうである。その検査の磁力計はペ
ースメーカーやクレジットカードでも引っか
けるほど精功でいろいろトラブルを起してい
る。ハイジャックのない空の旅ができる日が
一日も早く来るよう望みたい。

私が訪れたところはワシントンではWHO/
PAHO, Dhewのほかジョンス・ホプキンス大学
(バルチモア)、ピッツバーク大学、カリフォル
ニア大学(バークレイ)、カイザー財団(オ
ークランド)、それに全米公衆衛生学会の第100

回大会開催地アトランチックシティなどである。米国でも医師不足は指摘されているが、内容は異なり、一般医に比べて専門医が2倍以上多い。女医が少ない、少数民族出身医師が少ないなどここなりに深刻である。そこで連邦政府は一般医コースの創設、修学年限の短縮、補助医の養成、少数民族出身医学生定員の拡大など補助金などをもって推進を図っている。一般に、大学生のうち40%が医学や法律に進んでおり、この傾向は強まりつつある。一方、連邦政府は大学などの教育機関に対する一般の養成補助金は打ち切りつつあり、授業料は高く大学への志願者は減りつつあるとのことである。

夏は行楽地のアトランチックシティで開催された全米公衆衛生学会は今回で100回目だそう、記念として立派なメダルをいただいたのは幸運であった。その学会の運営方法はわが国とよく似ているが、発表時間、討論時間も少し長いようである。GNPの7%を占める医療費の高騰は米国でも国民的課題となっており、この学会でもメディケイド、HMOなど医療費関連問題が演題の中で大きなシェ

アを占めており、公衆衛生学関係者が真剣に討議をしていた。米国における保健計画は理論はあるが、実体はないと教えられたが、大学の教授や助教授が進んで地域の保健計画の策定に審議会委員として参画し、大学院学生などはワーキンググループとして参加しているのは敬意を表したい。

VI

今回、ヨーロッパ、ソ連、米国を駆けめぐって感じることはどこの国も老人が多く、重要問題として老人問題をとらえている。ソ連、チェコには経済計画の中に保健計画が入っているが、数字など詳細は聞き出すことはできなかったのは共産主義国家の秘密主義のためであろう。高騰を続ける医療費、ヘルスマンパワーの不足など各国とも苦しんでおり、限られた資源の効率的活用のために保健計画が必要であるということ各国とも計画策定に取り組んでいるが、未だ国民のニーズに即応した保健計画の模範答案は出ていない状況にあるようである。

編集後記

太平洋に頑固な高気圧が坐り込み、30度以上の暑い日が続く。照りつける太陽に道路も融け、はっきりなしに車のかきまわす風は、まるで砂漠の熱風である。このようにうだるような毎日でも、夜明けのひとときは涼しい。空はようやく明るくなっていた。雲ひとつない空は、日中の暑さを偲ばせた。しかし、ひんやりと心地よい風は、その暑さを忘れさせた。人影も見えない道に、紫陽花があでやかに咲きこぼれていた。そして、通い馴れた散歩道に、雑草が朝露にしっとりぬれていた。マッチをすれば、ぱっと燃え上りそうなほど、からからに乾いた日中の空気にあえぐ夏草に、朝露の光っているのにほっとする。 (平石)

海外社会保障情報 No. 23

昭和48年7月25日発行

編集兼発行所 社会保障研究所

東京都千代田区霞が関

3丁目3番4号

電話 (580) 2511